

学際統合的日本研究の成果を還元する試み：大学院 総合演習「知の加工学」を事例に

松永，典子

九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門国際社会情報講座

施，光恒

九州大学大学院比較社会文化研究院社会情報部門 社会変動講座

<https://doi.org/10.15017/1456060>

出版情報：比較社会文化．20，pp.61-76，2014-03-25．九州大学大学院比較社会文化学府
バージョン：
権利関係：



論文

学際統合的日本研究の成果を還元する試み —大学院総合演習「知の加工学」を事例に—

2013年10月31日受付, 2013年11月18日受理

松永 典子・施 光恒

Noriko MATSUNAGA・Teruhisa SE

キーワード: 日本研究、留学生教育、日本語教育、知の加工

はじめに: 留学生教育・日本語教育における人材 養成の課題

本稿は、日本研究の成果を留学生教育・日本語教育に還元する大学院教育の試みに関する実践報告である。

筆者らが所属する九州大学大学院比較社会文化学府では、平成21年(2009年)7月から、学際統合的な日本研究のプロジェクトチームを立ち上げた。本プロジェクトチームの狙いは、人文社会系のさまざまな学問分野を専門とする教員が集い、日本研究の新しい観点を打ち出すと同時に、大学院における日本研究者養成、あるいは留学生教育に資する教育モデルを探究することであった。

従来の日本の大学・大学院、特に人文社会分野は、日本人学生の教育を主対象としてきたため、アジアからの留学生のニーズに教育内容の改革が追いつかず、ニーズにかなう教育内容を十分に提供できていない。こうした問題を解決するひとつの方法として本実践が提示するのが、学際統合的日本研究の成果を教育プログラム開発に活用することである。

日本語教育と日本研究の連携は、今や日本のみならず海外の研究教育機関にとっても必要かつ緊急性の高い課題となっている(トムソン木下千尋ほか2010)。なぜなら、アジア、そして日本では、日本語教員が主体となる人文科学系の日本研究と、社会科学系の日本研究とは切り離される形で行われてきたのが現状だからである。

海外の動向をみると、日本語学習者数が最も多い中国・韓国・台湾では「日本語+翻訳」人材養成に加え、近年、「日本語+IT」人材の養成もなされてきている。ただし、社会科学系との連携の面では同様の課題が残されている。たとえば、中国においては日本語人材のうち社

会科学系人材の不足、日本語畑の研究者との協力の必要性が問題提起されている(徐一平2010)。連携の困難さに関しては、韓国やベトナムでも同様の問題が指摘されている。李徳奉(2010)は、連携が難しい要因として、「複合・融合的研究に慣れていないこと、大学の人文系の中で外国語教育のような技能分野に対する根強い偏見、日本語教育分野の繁盛ぶりから他の専門分野の存廃を恐れる被害意識、教育学に対する専門性欠如により自分の専門分野と日本語教育との連携のすべが分からないこと」を挙げている(同:159-160)。東南アジアでは、「日本語+医療」人材の養成が進展しているが、マレーシアなどでも「翻訳」など人文社会科学系人材の養成にはいまだ課題があることがわかった(松永・久木元2012)。

一方、日本語教育の「内容」が日本研究と直結しているように見えるオーストラリアでも、連携は必ずしもスムーズではないことがうかがえる。ヴェラ・マッキー(2010:31)によれば、オーストラリアでは語学プログラムと人文、社会科学のそれぞれのプログラムの間の緊密な連携を行うことは教育モデルとしてはあり得るが、現状ではなされていないという。また、現地で行う日本語教育の限界からアメリカの組織として1960年代に日本に開設されたアメリカ・カナダ大学連合日本研究センターでは多くの日本研究者や日本専門家が輩出されている。ただし、そうした人材養成と実践の蓄積はあるものの、1990年代後半より実施されている専門分野別の内容重視アプローチにおいても専門分野の研究・実務に必要な日本語とは何なのか、その日本語を教えるのに必要な専門知識とは何かという二つの課題があり、試行錯誤を続けているという報告がなされている。

さらに、早くから日本研究の下地がある欧米のうち、

英国の例をみると、「日本研究は確立された分野であるが、日本語教育は発展中の学術分野であり、日本語教育のステータスそのものがまだ確立していない」という(穴井宰子、2010:78)。そのため、日本語教育の発展のためには、日本研究の協力および言語学や他の外国語教育との積極的な連携が重要な課題と位置づけられている。また、多様化する日本語学習者のニーズに対して、日本研究者と日本語教育者がどのように補完しあっていくべきか、理想的な補完関係に関しては模索段階であるとされている(同上:75)。

1 人文社会系との連携：先行研究の問題点と本実践の目的・方法

以上の課題に対して、日本語教育界では90年代から知識教授ではない文化教育、いわゆる「リテラシー教育」や語学偏重ではない「内容重視の教育」が提唱され、アカデミックジャパニーズ研究、コンテンツベースの教科書作成へと展開されてきている。ただし、工学系、医療系など特定の専門知識を必要とする分野を除き、日本語教育分野以外の研究者が参加して作成された教科書や教育カリキュラム自体、限られており、社会科学系との連携及び総合型日本語人材(日本語+人文社会系人材)の養成には課題が残されている。

日本においては「日本についての理解を第一義的な目的とする研究」を含めれば、海外における日本研究と比べ、日本研究の意味する範囲は広いと考えられる。その意味では、日本の大学であれば、日本のことについてはどこでも学べると言っても過言ではない。また、近年、日本国内でも日本研究、日本学を通じた教育研究プログラムへの関心も高まっている。ただし、政策研究大学院大学日本言語文化研究プログラム、法政大学大学院国際日本学インスティテュート、明治大学国際日本学研究科、関西大学EU-日本学教育研究プログラムなど、日本研究という看板を掲げた日本の大学院は限られている。さらに、いずれも日本に関する個別諸学をメインに据えた教育プログラムであり、特定の専門領域を超えた教育連携や人文社会科学を俯瞰した人材養成という観点には乏しい。

学部レベルでは、東京外国語大学日本課程で「日本語教育の世界を通して「日本」を学ぶ」という実践の取り組みが見られるが、「日本語教育学入門」という科目名に象徴されるように、「日本」の枠組みが「日本語教育」をはじめとする人文系に特化している点是否めない。

その他にも日本研究という観点は示されていないものの、人文社会系と留学生教育・日本語教育の連携に関し

ては、学部レベルでは、専門科目と連携したレポート作成支援等の実践が報告されている。舟橋・大本(2011)は学部留学生の日本語学習支援として、専門科目担当の教員と連携したレポート作成支援に取り組んでいるが、専門教員は科目を「協賛」科目として提供し、提出されたレポートについてフィードバックするという役割にとどまっている。専門教員からは「形式は整ってはいたが、内容が不十分」であることが最大の問題点として指摘されており、「専門分野におけるフォーマットの提示、論述方法の指導は専門教員が行うべき」との意見もあるという。

以上のように、日本研究、日本語教育それぞれに留学生をターゲットにした教育プログラムが生まれ、実践が行われてきているものの、人文系に偏らない人材養成に焦点化したものは見当たらず、依然として人文社会系(特に社会科学系)人材養成には課題が残されていることが確認できた。

本稿では、総合型日本語人材の養成に向けた大学院教育プログラムの開発に向けて、これまでの授業実践をふりかえる。具体的には、総合演習「知の加工学」受講によって得られたもの、不足しているものが何かを受講生のレポート・発表についての分析およびインタビュー等によって明らかにする。

2 日本研究の成果を教育に還元する試み：総合演習「知の加工学」の概要

総合型日本語人材養成に資する教育としては大学院レベルではより専門的・統合的な「内容」が求められている。こうした課題を受け、本大学院では2009年度より組織一丸となり学際統合的日本研究プロジェクトを立ち上げ、2010年度からは、総合演習「知の加工学」という授業科目を開講し、日本研究の成果を教育に還元する試みも始めた。

その際、新しい日本研究の観点として本研究プロジェクトでは「知の加工学」というものを掲げた。「知の加工学」は、日本の特徴の一つは、外来の知を積極的に受容し、自分たちになじみやすいように加工し、自分たちの暮らしの改善のために活用する、あるいは他者(他国)の暮らしの改善のために発信するという点で非常に秀でていたことに見出せるという想定に立つ。「知の加工学」とは、そうした外来の「知の受容・加工・活用・発信」の過程や巧みな手法に着目することを通じて、日本の歴史、文化、社会に対する理解を深めていくことを目指す新しい学際統合的な日本研究のプログラムである¹。「知の加工学」プロジェクトには、日本語教育学、政治理論、

国際関係論、人文地理学、科学史、軍事史、日本史、近現代文学など多様な人文社会系の学問を専門とする研究者が集まった。また、総合演習「知の加工学」では、こうした多様な人文社会系の研究者が、協力して授業を担った。

こうした取り組みは、「知の加工学」という切り口が現在、人文社会科学に求められている個別学問を俯瞰し統合する視点を有する点から、統合的の日本研究の研究視点としても有効であることは確認され、一定の評価を得た。ただし、本取り組みはあくまで日本研究を主眼とした研究プロジェクトであり、当初より留学生教育・日本語教育という観点から教育プログラムを考えてなされたものではないことから、様々に改善を加えていく必要があることを前提としている。

本演習では、日本が知の「加工」「活用」に秀でている点に着眼し、日本と他のケースを比較することにより、日本の長所や短所、今後の発展・改善の方向性など個別の課題を明らかにしつつ、他国の同様の課題にも貢献し得る普遍的な視点を確保することを目標としている。演習はオムニバス形式で、「文化・歴史」、「政治・思想」、「産業・技術」など、それぞれの分野における研究成果を講義したうえで、参加者全員での議論を行う。このため、各回2コマ連続の授業である。オリエンテーション、出席管理、演習の運営はコーディネーターの教員2名(日本語教育学、政治理論)が協力して行い、TAによる演習運営補助のシステムをつくっている。適宜、教員メンバーも興味のある講義に参加し、ディスカッションに加わる。最終回に院生によるレポート発表会を実施する。

これまでの本演習の実施概要は以下のとおりである。

<実施概要>

- 開講回数 2010年前期5回(+レポート)・2010年後期8回(+レポート)²
- 2011年前期6回(+レポート)・2011年後期7回(+レポート)
- 2012年前期7回(+レポート)・2012年後期7回(+レポート)
- 2013年前期7回(+レポート)・2013年後期7回(+レポート)

□授業形態

基本的な授業の流れをまとめたものが図1である。具

体的には以下のIからVのような内容になっている。

- I オリエンテーション後、メーリングリスト(以下、ML)を作成する。MLの作成や授業の連絡にはTAを活用し、授業の記録などもMLを通して行う。各回、コーディネーターの教員2名も可能な限り参加する。
- II 各回2コマ連続の授業である。最初の時間に担当教員による報告があり、それをもとに次の時間は、教員と受講生、あるいは受講生の間でディスカッションを行い、理解を深める。
- III 授業後に、受講生(各回の担当者)は授業について記録を作成し、ML(ブリーフケース)に提出する。
- IV まとめられた授業記録は、教育研究成果の発信のため、ホームページ上にアップロードされる。受講生は授業の復習やさらに理解を深めるためにそれを利用する。
- V 学期の最後の時間は、受講生それぞれが「知の加工」に関連するテーマで、レポートを作成し、発表する。そのあと、全体で質疑応答を行う。

□授業目標 日本研究に関する基礎的な知識を習得する。

□評価方法 平常点とレポートを総合的に判断する。

□教員の専門分野

日本語教育学、人文地理学、日本近代文学、日本現代文学、政治学、政治思想、政治理論、国際関係論、日本史、科学技術史、軍事史、教育史

□受講生の内訳

2010年前期	日本人2名/留学生6名(中国4名・台湾1名・韓国1名)
2010年後期	日本人1名/留学生3名(中国)
2011年前期	日本人8名/留学生7名(中国)
2011年後期	日本人4名/留学生7名(中国)
2012年前期	日本人8名/留学生6名(中国4名・台湾2名)
2012年後期	日本人2名/留学生6名(中国4名・台湾1名・ベトナム)

¹ 本日本研究プロジェクトの成果出版物として下記のものがある。松永典子、施 光恒、吉岡齊編『「知の加工学」事始め——受容し、加工し、発信する日本の技法』新宿書房、2011年。本日本研究プロジェクトの設立経緯や問題意識に関しては松永「はしがき」(pp.1-5)を、「知の加工学」の概念や狙いに関しては施「知の加工学の可能性」(pp.10-28)を、それぞれご参照願いたい。

² 様々な専門分野の教員によるオムニバス授業であることから、開講時間に制限があり、通常はほかの授業が設定されていない金曜4限・5限の時間割の中で、教授会やほかの会議が開催されない日程に実施していたため、授業回数を前期・後期で揃えることが難しい年度もあった。

1名) 2010年度を例に、本演習のしくみを表にまとめると、
 2013年前期 日本人5名／留学生6名(中 表1、表2のようになる。
 国5名・韓国1名)

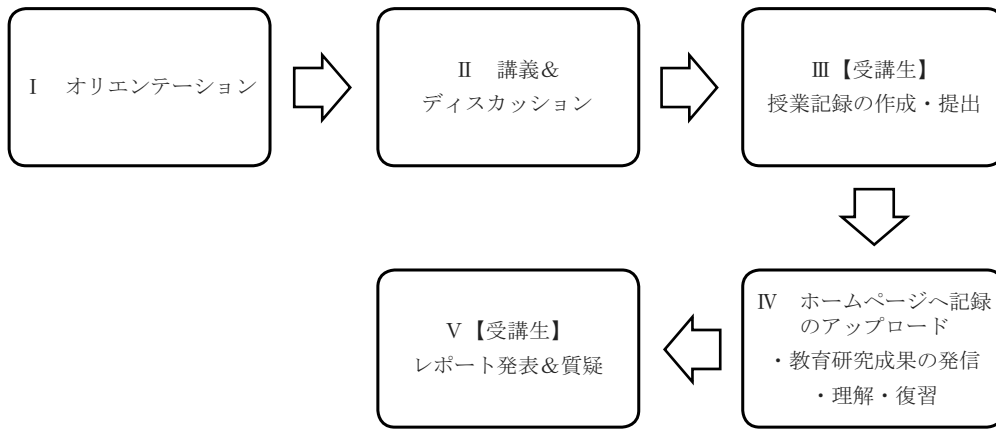


図1 授業の流れ

■表1 【2010年度前期】 総合演習「知の加工学」

	担当者・分野	講義テーマ等	受講生
1 オリエンテーション	松永典子・施光恒	受講の説明・「知の加工学」の紹介	受講登録
2 講義+演習	施光恒 政治理論	文化的資源を活用した市民教育——日本を題材に	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
3 講義+演習	松永典子 日本語教育	近代語彙の形成過程に見る日本の知の加工—新漢語創出方法を中心に—	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
4 講義+演習	吉岡斉 科学史	日本の原子力産業における技術開発力	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
5 講義+演習	阿部康久 人文地理学	帰国留学生の意識から見た「知の受容・加工・変容」	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
6 レポート発表	松永典子・施光恒	レポート発表+質疑応答	発表レジュメ(A4で1枚)準備・レポート提出

■表2 【2010年度後期】 総合演習「知の加工学」

	担当者・分野	講義テーマ等	受講生
1 オリエンテーション/講義+演習 ³	松永典子・施光恒 ／三輪宗弘 軍事史	ドイツの石炭液化成功の幻想と海軍の航空機用ガソリン製造—海軍の技術選択の失敗—	受講登録 担当者による講義記録作成・MLへの投稿
2 講義+演習	服部英雄 日本中世史	知の加工学から考える『鉄砲と煙硝』	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
3 講義+演習	大河原伸夫 政治学	幕末・明治期における西洋の政治的諸概念の加工——認知意味論的な視点——	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
4 講義+演習	波湯剛 日本近現代文学	九州帝大初的女子留学生—趙賢景の軌跡と知の移動/加工—	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
5 講義+演習	松井康浩 国際関係論	日本におけるコミュニティ概念の受容と自治会活動の展開	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
6 講義+演習	松本常彦 日本近代文学	日本近代文学における美的身体受容と表象	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
7 講義+演習	鏑木政彦 政治哲学	『知の加工』と教養—ドイツ哲学受容における日米比較を通して	担当者による講義記録作成・MLへの投稿
8 レポート発表	松永典子・施光恒	レポート発表+質疑応答	発表レジュメ(A4で1枚)準備・レポート提出

³ 前述したように開講時間数が制限される関係で、オリエンテーションと第1回目の授業を同時に実施している場合がある。

3 授業実践の分析：専門分野以外の学問分野を学ぶことは、受講生に何をもたらしているのか

本章では、受講生によるレポートやアンケート・インタビュー等をもとに、専門分野以外の学問分野を学ぶことは、受講生に何をもたらしているのかについて分析していく。

3.1 受講生のレポートの分析

ここでは、受講生のレポートテーマの選択と内容の2点から分析していく。

3.1.1 レポートテーマの選択

まず、受講生のレポートテーマの選択からどのような傾向が見られるか、分析するために、受講生のうち、前期・後期連続で受講した院生のレポートのテーマを年度ごとにまとめてみた(表3～5参照)。連続受講の院生に限定したのは、演習受講が受講生のレポートのテーマ選択に与える影響の変化をみるためである。

2010年度の受講生の場合、表1、表2の「講義テーマ」と表3の「テーマと講義テーマとの関連」とを対照させてみると、連続受講の4名のうち、前期は「留学生の就職」「知の加工学」「外来語」「原子力利用」というように、全員が講義テーマと同じか関連性の強いテーマを選択している。そのうち2名は自身の研究テーマと同様のテーマ(「留学生の就職」「原子力利用」)である。後期には、連続受講の4名のうち1名のみ「鉄砲と塩硝」という講義テーマと同じテーマを選択しているが、2名は自身の専門分野とは異なる分野のテーマを選択している。

2011年度の場合、表4にあるように、連続受講の8

名のうち、前期は4名が自身の研究テーマと同様のテーマである。後期には、8名中7名が自身の研究テーマとは異なる分野のテーマを選択している。ただし、そのうち1名は「知の加工」に関連するテーマで、レポートを作成するという課題の主旨に合致していなかったため、個別に指導を行った。

2012年度には、表5にまとめたように、連続受講の7名のうち、前期は3名が自身の研究テーマと同様のテーマである。後期には、7名中2名が自身の研究テーマと同様のテーマであるが、残りの5名は自身の研究テーマとは異なる分野のテーマを選択している。

以上のように、全体的傾向としては前期よりも後期のほうが自身の研究テーマとは異なる分野のテーマを選択する傾向にあることがみて取れる。つまり、2010年度前期は講義テーマとほとんど同じか極めて近いテーマを選択する受講生が多かったのが、後期には講義テーマとは離れたテーマ設定をするようになってきている。これは、留学生の場合、学部時代は日本語が専門で、特定の専門分野を有しない場合がほとんどであるため、受講生それぞれが「知の加工」に関連するテーマという与えられた課題に対して、当初は講義テーマに引きずられた選択がなされるのではないだろうか。それに対し、受講が進むにつれ、自身の研究テーマとは異なる分野のテーマを選択する傾向が強まる。このことは、講義担当教員の専門分野や修士課程における自身の専門分野からは異なる分野へも視野を広げている可能性があることを指摘できる。

■表3 【2010年度】 テーマと講義テーマとの関連：強い◎ あり○ なし× 専門分野と同じ●

国籍	専門分野	時期	テーマ	時期	テーマ
中国A	留学生の就職	前	留学生の就職	後	鉄砲と塩硝 ◎
日本A	日本語教育史	前	知の加工学 ◎	後	「中国事情」「韓国事情」○
中国B	科学技術史	前	外来語 ◎	後	マンガブーム ○
中国C	科学技術史	前	原子力利用 ◎●	後	科学技術政策 ●

■表4 【2011年度】 テーマと講義テーマとの関連：強い◎ あり○ なし× 専門分野と同じ●

国籍	専門分野	時期	テーマ	時期	テーマ
中国D	科学技術史	前	オタク ○	後	電子力発電 ●
日本B	社会学	前	カワイイ文化 ●○	後	マクドナルド ○
中国E	科学技術史	前	華禍論 ○	後	国家資本主義 ○
中国F	科学技術史	前	和製漢語 ◎	後	明治維新と洋務運動 ○
中国G	科学技術史	前	高速増殖炉 ●	後	中国お宅用語 ○
中国H	日本語学	前	顔 ●	後	ニセモノ文化 ○
日本C	日韓関係史	前	上海租界と彦島租借 ●	後	朝鮮への日本財閥進出 ○
中国I	科学技術史	前	茶道 ×	後	人材流出 ○

■表5 【2012年度】 テーマと講義テーマとの関連：強い◎ あり○ なし× 専門分野と同じ●

国籍	専門分野	時期	テーマ		時期	テーマ	
中国J	科学技術史	前	自然エネルギー	●○	後	発電電分離	●
中国K	科学技術史	前	NTTの携帯指輪	○	後	風力発電	●
日本D	日本語教育	前	ロシアの日本語教育	○	後	大黒屋光太夫と知	○
日本E	政治学	前	若者の右傾化現象	●	後	「サンデル・ブーム」	×
台湾A	社会学	前	『おたく』から『宅』へ	○	後	日本のポピュラー文化	○
中国L	日本語教育	前	マルチメディア教育	○	後	パクリiPhone	○
中国M	科学技術史	前	日中原子力発電の協力◎●	◎●	後	不確実性とリスク	×

3.1.2 レポート内容

続いて、レポートの内容から分析を加えてみよう。特に、本演習が開講された2010年度のレポートには、「知の加工学」という初めて接する学問領域に対する印象や各自の捉え方、取組方といった内容が取り上げられている。これは、他の年度には見られないひとつの特徴と言える。

たとえば、次のような印象が述べられている。以下、原文のままである。下線は引用者による。(ア)は中国の留学生、(イ)は韓国の留学生、(ウ)は日本人学生である。

(ア)留学生として、この授業を受けて、「文化・歴史」、「政治・思想」、「産業・技術」など、さまざまな分野における研究成果をふれて、よくわからないけれども、自分の視野が広がるようになった。この視点からみると、「知の加工学」という授業を受けた過程そのものが学生たちにとっては、小さい範囲における新しい「知の加工学」の形成過程と言えるだろう。

(イ)最初は自分の専門と全然違う内容に関してはどのように消化できるのかという心配とともに若干のとまどいもありました。しかし、「知の加工学」の授業は「知識の移り(引用者注：移転)」が、いくら専門性が違っても、「知の加工」の面においては共通するところがあることを自分に確認させられる授業でありました。・・・(中略)・・・授業の一貫性のため「共通するものへの探り」が行われている気がしますが、全部、同じような結論にいくのは「知の広がり」の面においてはあまりよくないような気が今はするのです。・・・もっと、先生たちが自由に話したいことを話すような環境が大事ではないかということです。そうすることで「知の加工学」の新しい面が出てくるのではないかと思います。「知の加工学」の授業を通じてもう一つ感じたのは、これからは学問の領域においてその警戒線(引用者注：境界線)というものが見えなくなる可能性

もあるのではないかと考えられます。・・・現在の比較社会文化学府の授業は、専門知識の授業以外の授業も参加できます。専門分野以外の授業参加はある人においては意味がない話だと思われるかもしれないが、しかし、そこから「知の広がり」が生じると思います。「知の加工」の作業は「知の広がり」の中で行われる学問であると私は思います。

(ウ)学生の中には、自分自身の研究テーマとは異なる専門をさせても理解しづらいという意見も出たが、異なる分野の学問だからこそ「知の加工学」の授業に参加する意義があるのであり、100%の理解は無理でも、異なる分野に触れることで、それを自分自身の研究にどのように活かしていくか考えるべきであろう。「知の加工学」の授業によって自分を豊かにできるかどうかは学生自身の意識にかかっているのではないだろうか。

以上の内容からわかることをまとめてみると、(ア)の中国の留学生は、受講により視野の拡大がなされ、受講そのものが小さくはあっても新たな「知の加工」の形成過程であるという捉え方をしている。つまり、単に知識を受け取っただけではなく、それを自分なりに咀嚼することにより、主体的に自分なりの知を形成していこうとする姿勢がそこにあることがうかがえる。(イ)の韓国の留学生の場合、専門分野は異なっても、「知の加工」には共通性や知の広がりがあることを指摘しており、俯瞰的視野で授業を振り返っている可能性を指摘できる。さらに、日本人学生の場合、異なる分野の授業理解は困難であると捉える他の学生の意見を踏まえ、異なる分野に触れることは自分の意識次第で自分を豊かにできるといふ持論を展開している。

以上のように、ここで取り上げた3名は、専門分野以外の学問分野を学ぶことの意味をそれぞれに考え、本総合演習の趣旨を汲み取ろうとする積極的意識があることがうかがえる。ただし、その一方で、1コマだけの授業

で自身の専門分野以外の学問分野の内容を理解することには困難を感じている受講生がいることも同時に示されており、授業理解ができるかどうかで、本演習に対する評価も分かれてくる可能性が示唆されている。

3.2 アンケートによる授業の分析

次に、アンケート・インタビュー⁴等をもとに、専門分野以外の学問分野を学ぶことは、受講生に何をもたらしているのか、授業内容の分析から検討していく。

アンケートは人数が4名と限定的であるため、統計的には処理しない。2010年度のアンケートからは、資料提示の仕方、ディスカッション、その他の順にみていく。

□資料提示の仕方について：

・次の授業へ向けて、内容を紹介する資料を配布してもらうほうが授業理解の助けになる。(事前に次回の内容を各自まとめるシートのようなものがあって、それを書くほうがよい)。

・授業の際、簡単なレジュメを提示する必要がある。
・①タイトルだけではなく前もって授業の内容を学習者に知らせた方がいいと思います。当日なら、先生の話聞きながら資料を読むのが難しいです。資料の内容を全部飲み込まれませんので質疑とかできなくなります。②いつも資料が枚数が多いから、心理的にこの授業の内容は難しいと思ってしまうわけです。もし、先生達は莫大な内容が一、二枚のプリントまで概括できるなら(具体的な内容じゃなくてもいいから、箇条書きで授業の筋を書けばいい)一目瞭然と思います。

□ディスカッションの仕方について：

・グループディスカッションのほうが話しやすい。
・現在のままのように自由発言でもいいし、2、3人グループに分けられてもいいと思います(なるべくグループの中に日本人がいる)。

□その他：

・今回は地理的な移動に伴う知の加工をテーマにした講義が多かったように思う。来年度以降は、「分野を移動する場合の知の加工(変化)」についても取り上げていただくと個人的には嬉しい。

また、授業の難易度や授業が理解できているかの問いに対し、留学生の中には授業は「難しい」、授業が「理解できているとはあまり思わない」と理解があまり進んでいない者も見られた。また、この留学生の場合、予習・

復習に関しても、「自分にとって理解し易く興味を持っている授業なら時々復習して、課外の資料を調べる」が、全般的に内容が難しく感じられたという感想もあった。ただし、この場合にも、「具体的な分野というより、日本の学問に対する視野が広がり、知識面が豊かになりました」と、視野や知識の拡大については評価されている。さらに、帰国後、「知の加工学」で学んだ知識をどのように生かすかについての問いには、「まだ入門ですので、一体帰国後、この授業で学んだ知識はどのように生かすか、どこに生かすか、本当に活躍できるかどうかはまだはっきり分かりません。しかし、確かに視野が広まった(ママ)ことができました」と、視野が広まったことに関しては改めて指摘されている。修士1年生の後期終了時点で、将来のことに関してたずねるのは無理があったことも確かであるが、視野の拡大について改めて指摘されている点は注目すべきであろう。また、授業改善案や知識・視野の拡大についての指摘は留学生に限られており、日本人学生の場合には、「知の加工」で取り上げられる事例についての希望が述べられているのみであったことから、授業改善に関しては、主に留学生の授業理解に焦点化して検討していく必要があることが示唆された。

3.3 インタビュー等受講生からの意見徴集による授業の分析

2010年度の授業アンケートからも、授業改善に関しては、主に留学生の授業理解に焦点化して検討していく必要があることが示唆されたことを受け、インタビューは2012年度の受講生のうち、留学生のみ2名に実施した。内訳は非漢字圏のベトナム、漢字圏の中国各1名ずつである。インタビューは1名は対面、1名は都合により非対面で行った。中国の留学生からは、専門以外の分野について講義を聴いたり、ディスカッションしたりすることは、「自身の視野が広がる」、「傾聴能力と質問力が鍛えられた」という意見があった。また、注目すべきなのが「講義の内容だけでなく、他の専門分野の院生の意見を聴き、ディスカッションすることが楽しい」、「知識と視野を広げることに繋がった」という点が共通して指摘されている点である。異なる専門分野の受講生によるディスカッションの有用性に関しては、2012年度受講の日本人の院生からも個別に指摘があった点である。せっかく様々な分野の院生と一緒に授業を受けているので、受講生相互の交流の機会を増やし、ゼミの議論がもう少し活発になされるようにしたいということで、「受講生それぞれの名前を紙に書いて机の前に置く」、「机・椅子が可動式のものであれば動きやすいが、

⁴ 使用したアンケートとインタビュー項目に関しては稿末の資料として掲載。

今の教室環境では動くことが難しいので、休み時間に席を移動するなど、グループワークにしても固定化したメンバーだけでなく、相互に交流できる機会を作る」等の具体的な提案がなされ、実際の授業の中でもこれらの提案を取り入れた。

その一方で、ベトナムの留学生からは「事前に資料が配布されないため、歴史や政治など、その時間だけでは理解することが難しかった内容もある」という点が提示された。中国の留学生からは「レポート発表前にレポートが課題に即しているか、事前指導が必要だった」という点が指摘された。以上から、専門外の講義内容についての理解を促すための教育的配慮や、レポートが課題に即したものであるかどうかのレポート作成に関わる事前指導、いわゆるアカデミック・ライティングに関わる指導については不足していた点があることが指摘できる。

4 考察：学際統合型教育の検証と今後の課題

前章では受講生のレポート・発表およびインタビュー等についての分析により総合演習「知の加工学」受講によって得られたもの、不足しているものが何かを明らかにした。それらをさらに今後の学際統合型教育のカリキュラムモデル開発につなげるため、どのような要素が学際統合型教育に必要な要素であるかについて考察を加える。

4-1 学際統合型教育に必要な要素

レポート・インタビュー等の分析の結果、専門以外の分野について講義を聴いたり、ディスカッションしたりすることは、知識や視野の拡大につながっていることがわかった。また、注目すべきは「講義の内容だけでなく、他の専門分野の院生の意見を聴き、ディスカッションすることが楽しい」、「知識と視野を広げることにつながった」、「受講生相互の交流の機会を増やすことが必要」という点が共通して指摘されている点である。このように留学生・日本人双方から異なる専門分野の受講生によるディスカッションの有用性に関しての意義が指摘されている点は学際統合型大学院教育にとって重要な指摘である。

その一方で、事前の配布資料の必要性やレポート発表

前の事前指導の必要性など、留学生に対しては専門分野の内容理解と日本語学習・発表などのアカデミックスキル習得をつなぐ指導の必要性が示唆されている。こういった日本語教育、アカデミックスキル指導の不足は、専門の講義内容の理解を中心におく大学院教育では特に指導が行き届かない点であり、受講生のレポートや発表の内容からも裏付けられるところである。

4-2 学際統合型大学院教育の課題

続いて、専門分野別の大学院教育との比較から学際統合型と銘打った本実践の位置づけを検討し、学際統合型大学院教育の場合、今後、どのような教育目標を設定することができるかについて検討する。

この点について検討するために、専門分野別大学院教育と学際統合型大学院教育の教育目標についての比較を試み、表6にまとめてみた。教育目標の項目設定にあたっては阿部康久(2011)の帰国中国人留学生が日本留学の何を評価しているかという知見を参考にしつつ、前節で検討したアカデミックスキル養成の要素を加え、整理した。阿部(2011)によると、専門分野に関する知識の提供及び論理的な思考力・考え方、視野の広さ、学問・研究の方法や方法論が帰国留学生によって評価されている。

専門分野別大学院教育と学際統合型大学院教育の教育目標について比較した結果、専門分野に関する知識の提供、論理的な思考力・考え方の養成、視野の広さの養成といった点では双方には差が見られないと考えられる。ただし、本実践の場合には、個別の学問分野のみならず、個別学問を俯瞰し統合する「知の加工」という視点を有することから、学問・研究の方法論においてもより幅広い分野の視点の養成が期待できる。また、日本語教育分野で課題となっている総合型日本語人材の養成(日本語+人文社会系人材)に関しては、本実践では目標に設定していないが、日本語教育分野の教員が本実践を担当していることから、日本語教育の観点からの目標設定を取り入れることにより、専門分野の知識獲得のみならず、学術日本語の読み書き能力の養成にも焦点を当てていくことは可能である。ただし、学術日本語の読み書き能力の養成は別途検討すべき課題でもあることから、今後の検討課題としておきたい。

■表6 専門分野別・学際統合型大学院教育の教育目標の比較

	専門分野別の大学院教育	本実践(学際・統合型大学院教育)
総合型日本語人材の養成	困難：各専門科目が独立	専門教育と日本語教育の連携が可能
専門分野に関する知識の提供	可能	可能
論理的な思考力・考え方の養成	可能	可能
視野の広さの養成	可能	より幅広い視点の養成が可能
学問・研究の方法や方法論の獲得	専門分野別	可能：個別学問を俯瞰し統合する視点
学術日本語の読み書き能力の養成	焦点ではない	可能：焦点を当て得る

おわりに

最後に、総合演習「知の加工学」に不足しているものを確認し、学際統合型大学院教育の課題について検討する。事例として、2010年度を受講生のアンケートの意見をもとに次の年度の授業をどのように改善すべきか示した(受講生の授業理解を促進するために立てられた)対策案とその後の経過についてみていくことにする。2011年度を受講生の授業理解を促進するための対策案が以下である。

- 1 授業の予習として、報告内容を理解するために必要な専門用語、キーワードについて調べてきてもらうようにする(MLで配信・指示)。
- 2 授業前に、報告の概要(400字程度)を受講生に示しておき、関連論文や参考文献を示すなど、背景の理解を促しておく(MLで配信・指示)。
- 3 授業の際、資料を示すだけでなく、報告に関する概要をまとめたレジュメを配布する。(専門分野の異なる留学生にとって、背景知識もないままに大量の資料をもとに報告を聴いても、その場だけで理解することはなかなか難しいという現実がある。理解できないので、質疑、ディスカッションに参加できないというジレンマがある。)

以上の対策案については、担当教員用のMLに配信され、問題点の共有化が図られた。それにより、2011年度は授業の概要を事前に配信する、授業の際も概要をまとめたレジュメを配布するといった対応は全教員ではないものなされていった。ただし、受講生に予習のための資料を事前に配信するという事は教員にとっても事前の講義日以前に資料を作成するという必要性を要するものであり、かなりの負担が強られるものである。一方、対策案1の「報告内容を理解するために必要な専門用語、キーワードについて調べてきてもらうようにする」のほうが簡便な方法のように考えられるが、この方法はほとんど行われなかった。担当教員がそれぞれML

に配信するというより、これらの内容は講義タイトルとともに事前にシラバスやオリエンテーション時の説明資料に組み込んでおくほうが受講生にとっては、その講義への理解や関心を高める一助になる可能性がある。

しかし、2011年度は特に授業アンケート等を特に行わず、授業改善に対する対策も特にとらなかった。そのこともあり、授業担当者全員による教育目標・教育方法の共有化が多少疎かになったことは否めない。ただし、多人数によるオムニバス授業に関しては、教育目標・教育方法の共有化をはかることは一概には難しいことも確かであり、そのためには各専門分野の教員が編集段階から作成に加わる共通テキストを作成することも一案ではないかと考える。

以上の点から、留学生がより専門的・統合的な「内容」を理解するためには教育目標・教育方法を共有していくために各専門分野の教員が編集段階から作成に加わるテキストの作成および講義のみならずディスカッション等受講生が主体となって活動できる演習部分をどう組み込むかといった点を含めたカリキュラム開発が必要であることが示唆された。

付記

本研究プロジェクトは九州大学大学院比較社会文化研究院日本研究プロジェクトチームによるプロジェクト：「知の中継地としての日本に関する総合的研究—『知の加工学』の創成に向けて—」としてスタートし、平成21年度～22年度九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクト採択課題として九州大学からの助成を受けている。

本稿は科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号25511005(平成25年度～平成28年度)「日本語教育・留学生教育における日本型「知の技法」の活用に関する研究(研究代表者松永典子)の助成を受けた研究課題成果の一部である。本稿の執筆に関して協力を得た科研メンバーの阿部康久准教授、緒方尚美氏(博士後期課程)に感謝申し上げる。

参考文献

- 阿部康久 (2011)「日本留学者の帰国後の就業状況と留学経験への評価－中国人の大学院修了者を事例として－」松永典子・施光恒・吉岡斉編『「知の加工学」事始め—受容し、加工し、発信する日本の技法』新宿書房、pp.171-191
- 青木惣一 (2007)「日本研究センターにおける専門分野別日本語教育—日本関係の専門分野を有する大学院生・専門家に対する専門分野別内容重視アプローチの実践報告」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』(21)、pp.79-123
- 穴井幸子 (2010)「地域連携という枠組みの中での連携—英国高等教育において」トムソン木下千尋ほか『日本語教育と日本研究の連携—内容重視型外国語教育に向けて』、ココ出版、pp.67-80
- 綾部恒雄編著 (1992)『外から見た日本人—日本観の構造』朝日新聞社
- Clifford Geertz (1988) *Works and Lives, The the Anthropologist as Author*, Stanford University Press、(クリフォード・ギアーツ著; 森泉弘次訳(1996)『文化の読み方/書き方』岩波書店
- 星野勉 (2005)「『日本研究』の研究 (=メタ・サイエンス)の理論的構築に向けて」『国際日本学：文部科学省21世紀COEプログラム採択日本発信の国際日本学の構築研究成果報告集』3、pp.17-43
- 徐一平 (2010)「日本語教育と日本学研究の関係：中国の日本語教育と日本研究を例に」(日本語学・日本語教育学部会報告、第4回国際日本学コンソーシアム) お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」事務局、大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書 Vol.平成21年度学内教育事業編、pp.146-149 <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/49125>
- 高麗大学校日本研究センター(2012)日本語学・教育叢書『人文科学と日本語の接点総論編』図書出版ムン
- 高麗大学校日本研究センター(2012)日本語学・教育叢書『人文科学と日本語の接点各論編』図書出版ムン
- 李徳奉 (2010)「連携の難しさ—韓国における連携のジレンマを他山の石に一」トムソン木下千尋ほか『日本語教育と日本研究の連携—内容重視型外国語教育に向けて』、ココ出版、pp.159-170
- LinhPhan (2003)「ベトナムにおける日本研究と研究者育成」法政大学国際日本学研究所・国際日本学研究所編『国際日本学』文部科学省21世紀COE プログラム採択日本発信の国際日本学の構築研究成果報告集、法政大学国際国際日本学研究所、pp.25-34
- 丸山千歌・小澤伊久美 (2002)「専門教員と学習者へのニーズ調査に基づいた書き方指導—論文執筆の準備段階としての指導—」『小出記念日本語教育研究会論文集』(10)、小出記念日本語教育研究会、pp.123-139
- 松本隆・山口麻子・高野昌弘 (1998)「経済分野の専門的日本語教育—語学教師と専門家の連携を目指して」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要 (21)、pp.1-40
- 松本隆 (2011)「2010-11年度カリキュラム報告：アメリカ・カナダ大学連合日本研究センターの中上級日本語集中教育」アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要 (34)、pp.151-170
- 松永典子・施光恒・吉岡斉編 (2011)『「知の加工学」事始め—受容し、加工し、発信する日本の技法』新宿書房
- 松永典子・久木元恵 (2012)「マレーシアの中等教育における日本語教育の歴史的経緯と今後の展開」*The electronic proceedings for the Third International Conference of the Japanese Studies Association in Southeast Asia*、pp.220-233
- メイナード泉子 K. (2007)「言語学と日本語教育学—知の受容から知の創造へ (特集日本語教育学とは何か)」『日本語教育』(132)、pp.23-32
- 小原重信 (2008)「B-8 プロジェクトマネジメント科学における学際と統合視点における認識と方法：第4世代の知識体系を進化させる実践と科学の接点を探る (学際・異種領域融合のアプローチトラック、サービス化社会における知識結集型プロジェクトマネジメント—イノベーションとサステナビリティの基盤と方法—)」一般社団法人国際P2M学会、研究発表大会予稿集2008(春季)、pp.126-133
- 佐藤由利子 (2011)「日本留学成果の促進・阻害要因に関する考察—インドネシアとタイの元日本留学生の質問紙回答分析から」留学生教育学会編『留学生教育』厚有出版、pp.1-11
- 高野愛子 (2012)「日本語I 日本語教育学入門：日本語教育の世界を通して「日本」を学ぶ」東京外国語大学日本課程『東京外国語大学日本研究教育年報 (Japanese studies and education annual report)』(16)、pp. 83-94
- 谷口龍子・坂本恵 (2013)「『国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査』—欧米型 (日本研究の中の日本語教育) とデータベース中間報告 I アジア型 (日本語教育から日本研究へ) —」『日本語・日本学研究 (Journal for Japanese Studies)』(3)、東京外国語大学

国際日本研究センター、pp.109-120

トムソン木下千尋ほか(2010)『日本語教育と日本研究の連携—内容重視型外国語教育に向けて』コ出版
 臼杵美由紀(2009)「アカデミック・ライティング指導の果たすべき役割とは何か：留学生のための日本語支援を通して」『上越教育大学研究紀要、』No.28、pp.1-8
 ヴェラ・マッキー(2010)「オーストラリアの大学における日本語教育および日本研究の現状と限界」トムソン木下千尋ほか『日本語教育と日本研究の連携—内容重

視型外国語教育に向けて』pp.27-36

楊棟梁(2010)「中国における日本研究の新たな動き(1997-2010) 李東哲主編、日朝韓中日文化比較文化研究双書『日本語文化研究』第二輯(下)、延慶大学出版社pp.1-14
 吉田和久(2005)「『菊と刀』の読み方と比較文化研究の現代的位相」『明星大学研究紀要』、日本文化学部・言語文化学科 13、pp.85-102

<資料1>

■講義テーマ

2010年度前期	
担当者・分野	講義テーマ
1 施光恒・政治理論	「文化的資源を活用した市民教育—日本を題材に」
2 松永典子・日本語教育	「近代語彙の形成過程に見る日本の知の加工—新漢語創出方法を中心に—」
3 吉岡斉・科学史	「日本の原子力産業における技術開発力」
4 阿部康久・人文地理学	「帰国留学生の意識から見た「知の受容・加工・変容」

2010年度後期	
担当者・分野	講義テーマ
1 三輪宗弘・軍事史	ドイツの石炭液化成功の幻想と海軍の航空機用ガソリン製造—海軍の技術選択の失敗—
2 服部英雄・日本中世史	知の加工学から考える『鉄砲と煙硝』
3 大河原伸夫・政治学	幕末・明治期における西洋の政治的諸概念の加工—認知意味論的な視点—
4 波瀲剛・日本近現代文学	九州帝大初的女子留学生—趙賢景の軌跡と知の移動/加工—
5 松井康浩・国際関係論	日本におけるコミュニティ概念の受容と自治会活動の展開
6 松本常彦・日本近代文学	日本近代文学における美的身体受容と表象
7 鏑木政彦・政治哲学	『知の加工』と教養—ドイツ哲学受容における日米比較を通して

2011年度前期	
担当者・分野	講義テーマ
1 施光恒・政治理論	ボーダーレス世界への疑念—近代文明世界の成立と「翻訳」の役割—
2 松永典子・日本語教育	中国人留学生教育にみる近代日本の「知の加工」—松本亀次郎に着目して
3 吉岡斉・科学史	日本の原子力産業の国際戦略
4 波瀲剛・日本近現代文学	京城/ソウルの昭和モダン
5 松本常彦・日本近代文学	日本近代文学における美的身体受容と表現

2011年度後期	
担当者・分野	講義テーマ
1 阿部康久・人文地理学	日本と中国の企業経営に見る知の「加工」あるいは「創造」—自動車産業の部品調達方法を事例として—
2 三輪宗弘・軍事史	太平洋戦争開戦と対日経済制裁—日米の強硬論の論理—
3 松井康浩・国際関係論	近現代ロシアにおける知の伝統・継承・断絶—日本との比較を念頭において
4 大河原伸夫・政治学	幕末・明治期以降における西洋の概念の「既存語」への加工—Natureと自然—
5 アンドリュウ・ホール・教育史	日本・アジア・西洋における日本植民地政策の研究動向
6 山尾大・イラク政治	中東と日本—知の「加工」に着目して

2012年度前期	
担当者・分野	講義テーマ
1 施光恒・政治理論	近代社会の基礎としての「翻訳」と「土着化」を通じた公共空間の形成—「知の加工学」の目的とは—
2 松永典子・日本語教育	清末の日本語教科書にみる知の技法
3 吉岡斉・科学史	原子力技術の、産業技術としての難しさ
4 松本常彦・日本近代文学	「知」を構成する諸言説間における摂取と加工という問題
5 阿部康久・人文地理学	日本と中国の自動車づくりにみる「知の加工」—部品発注方法に着目して—
6 松井康浩・国際関係論	ソヴィエト体制の改革・転換過程における知と知識人—西側の知の受容と加工の観点から

2012年度後期	
担当者・分野	講義テーマ
1 三輪宗弘・軍治史	航空機用揮発油製造技術と第二次大戦時の技術移転」
2 山尾大・イラク政治	独裁体制は如何に維持されるのか」
3 大河原伸夫・政治学	幕末・明治維新期以降における西洋の概念の加工—抽象概念の問題
4 アンドリュウ・ホール・教育史	日本植民地下の朝鮮教育政策1905-1919」
5 鍋木政彦・政治哲学	ドイツ的教養の受容の行方：ゲーテ像の日米比較を中心に
6 服部英雄・日本中世史	宗像の島々・小呂島、沖ノ島、大島の歴史と地誌

2013年度前期	
担当者・分野	講義テーマ
1 施光恒・政治理論	近代社会の基礎としての「翻訳」と「土着化」を通じた公共空間の形成—「知の加工学」の目的とは—
2 松永典子・日本語教育	明治後期の日本語口語教科書にみる知の技法」
3 吉岡斉・科学史	原子力技術の、産業技術としての難しさ
4 阿部康久・人文地理学	日中の企業戦略にみる知の加工—自動車とソフトウェア企業の事例から—
5 松本常彦・日本近代文学	「知」を構成する諸言説間における摂取と加工という問題
6 松井康浩・国際関係論	後期ソヴィエト体制下の「人権」運動と「市民社会」—「知の加工学」の観点から

■院生のレポートの題目

2010年度前期	
専門分野	レポートの題目
人文地理学	中国人留学生の就職に伴う国内移動と定着の動向について—福岡県を中心として—
日本語教育	2010年前期の「知の加工学」を振り返る
科学技術史	「日本留学経験者の帰国後の就職状況と日本留学への評価—中国人の大学院修了者を事例として」について
科学技術史	外来語の増加により日本語への影響
科学技術史	原子力利用の歴史、現状と未来の展望
政治哲学	「知の加工学」—日本文化の受容—留学生の立場から
政治理論	『行き過ぎた金融取引を規制する国際連帯税は有効か?』—通貨取引税の可能性

2010年度後期	
専門分野	レポートの題目
人文地理学	鉄砲と塩硝—歴史学から考える知の加工学についての感想
科学技術史	科学技術のグローバル化と中国科学技術政策に対応する知の加工についての感想
科学技術史	中国における日本のマンガブーム
日本語教育	「中国事情」「韓国事情」を終えて—知の加工という視点から—

学際統合的日本研究の成果を還元する試み—大学院総合演習「知の加工学」を事例に—

2011年度前期	
専門分野	レポートの題目
科学技術史	日本の「おたく」から中国の「宅女」—語彙の編纂から見た知の加工学—
社会学	「Cute」から「かわいい」、そして「kawaii」へ—日本若者ファッションに見る「知の加工学」—
政治理論	多角的な日本研究の可能性—アイデンティティ構築の材料提供として—
科学技術史	黄禍論ならぬ華禍論の時代到来
科学技術史	中国における明治以後の和製漢語の受容
中国文学	周作人の“複訳”感にみる「知の加工」—ギリシャ文学の翻訳を中心に—
科学技術史	高速増殖炉—もんじゅとCEFR—
科学技術史	茶道
韓国研究	欧米列強の上海租界と馬関戦争後の彦島租借拒否—高杉晋作の上海旅日記「遊清五録」から—
時間研究	機械時計製作技術の受容と加工—和時計に着目して—
日本語教育	長沼直見による H.E.Palmer のオーラル・メソッドの受容と加工について
英語教育	小泉八雲 (ラフカディオ・ハーン) について
日本語教育	近代日本に見る海外日本語教育での「知の加工」
日本語教育	顔についての考察—社会言語学から見る日本の社会文化
メディア史	帝国日本とラジオ—京城放送局を中心に

2011年度後期	
専門分野	レポートの題目
科学技術史	中国の自主電 (ママ) 子力発電について
社会学	日本におけるマクドナルドの「加工」
科学技術史	日本の「明治維新」と中国「洋務運動」から見る知の加工学
英文学	日本語における英語由来のカタカナ語—英語学習との関連から—
科学技術史	中国お宅用語の中の知の加工学
科学技術史	人材流出問題について
韓国研究	植民地期の朝鮮半島における日本財閥の進出と展開—「知の加工」からの考察
科学技術史	国家資本主義—知の加工学の視点から見る中国経済
文化人類学	中国雲南省大理白族自治州におけるキリスト教信仰について
日本語教育	中国のコピー文化

2012年度前期	
専門分野	レポートの題目
科学技術史	自然エネルギーの歴史と発展—日本の受容と加工
科学技術史	日本の知の加工学—NTTの指輪携帯とiphone4Sを例として
日本語教育	知の加工学—サッカーの地域密着
留学生教育	日本の大学を卒業した留学生と日本企業の知の加工
日本語教育	ACTFL-OPIの日本語教育現場での活用法—ブレースメントテストへの活用—
日本語教育	日本における漢字・漢文の受容・加工・発信について
日本語教育	インドネシア語における日本語起源の語彙の変化
日本語教育	ロシアにおける日本語教育のあけぼの—当時のロシアの国内事情をふまえて—
韓国研究	日本の蘭学における知の受容とその様相—朝鮮の西学との比較を通して—
政治理論	インターネットにおける若者の右傾化現象
日本語教育	対人コミュニケーションにおける知の加工学
社会学	再加工された「クール・ジャパン」—『おたく』から『宅』へ—
日本語教育	知の加工学の視点から見るマルチメディア教育
科学技術史	日中における原子力発電の協力

2012年度後期	
専門分野	レポートの題目
日本語教育	東遊(ドンゾー)運動(1904～1909)
政治理論	インターネット掲示板における「サンデル・ブーム」への評価
科学技術史	日本における「発送電分離」の問題点を考える
科学技術史	不確実性とリスクー中国のゆくえ
日本語教育	大黒屋光太夫と知
日本語教育	バクリ iPhone から見る中国式の知の加工法
社会学	海外における日本のポピュラー文化の受容ー台湾の「ハーリーズー」を例にー
科学技術史	次世代エネルギーの切り札風力発電

<資料2>

2010年度 「知の加工学」授業に関するアンケート

このアンケート調査は、学生の皆さんの視点から授業の満足度を測り、授業の改善に結びつけることを目的として実施するものです。なお、ご回答いただきました内容は授業改善のみに使用し、成績評価等には一切影響しませんので率直に回答して下さい。

- 現在の学年についてお答えください。
 - 修士1年
 - 修士2年
 - 博士1年
 - 博士2年
 - 博士3年
- 「知の加工学」の授業時間数についてどう感じていますか。
 - 足りている
 - どちらかといえば足りている
 - どちらともいえない
 - どちらかといえば不足している
 - 不足している
- 「知の加工学」の授業内容について、どう感じていますか。
 - 易しすぎる
 - やや易しい
 - ちょうどよい
 - やや難しい
 - 難しい
- 「知の加工学」は自分の専門と関係が深いと思いますか。
 - そう思う
 - どちらかといえばそう思う
 - どちらともいえない
 - どちらかといえばそう思わない
 - そう思わない
- 「知の加工学」の授業は内容が興味深く、魅力的だと思いますか。
 - 強くそう思う
 - ややそう思う
 - どちらともいえない
 - あまりそう思わない
 - 全くそう思わない
- 「知の加工学」の授業の教員は学生の理解度を確認しながらこの授業を進めていると思いますか。
 - 強くそう思う
 - ややそう思う
 - どちらともいえない
 - あまりそう思わない
 - 全くそう思わない
- 「知の加工学」の授業の教員は学生に興味をわくように工夫した進め方をしていると思いますか。
 - 強くそう思う
 - ややそう思う
 - どちらともいえない
 - あまりそう思わない
 - 全くそう思わない
- 自分は「知の加工学」の授業が理解できていると思いますか。
 - 強くそう思う
 - ややそう思う
 - どちらともいえない
 - あまりそう思わない
 - 全くそう思わない

9 「知の加工学」の授業に対してどのように勉強していますか。

勉強の内容を具体的に書いてください

予習： _____

復習： _____

10 「知の加工学」の授業は将来に役立つと思いますか。

- a. 強く思う b. やや思う c. どちらともいえない d. あまり思わない e. 全く思わない
具体的にどのような分野に役に立てるとと思いますか。

11 この授業は総合的に見て満足のいくものと思いますか。

- a. 強く思う b. やや思う c. どちらともいえない d. あまり思わない e. 全く思わない

12 「知の加工学」の授業をどのように行ったら良いと思いますか。

具体的な提案または改善案があれば記入してください

資料提示の仕方について： _____

ディスカッションの仕方について： _____

その他： _____

13 留学生の場合は、帰国後、「知の加工学」で学んだ知識をどのように生かすかを教えてください。

ご協力ありがとうございました。

<資料3>

2013年度 「知の加工学」授業に関するインタビュー項目
—大学院留学生の修学・研究上のニーズについて—

氏名(_____)

1 日本の大学院で修学・研究するうえで、最も大事なものは何だと思いますか。

2 日本の大学院に入って研究するうえで、最も困ったことは何ですか。

3 日本の大学院で修学・研究してみて、良かったと思うところがありますか。

4 研究の手法において、日本のやり方と母国のやり方で異なるところがありましたか。

(4-1 異なるところがある場合、どういう点が異なりますか。)

5 日本の大学院で修学・研究してみて、自分にまだ不足しているところがあると思いますか。

(5-1 不足しているところがある場合、どういう点が不足していますか。)

6 自分の専門以外の分野の内容について講義を聴いたり、ディスカッションしたりすることはあなたにとって意味がありますか。

7 「総合演習 知の加工学」は、ほかのゼミと何か異なるところがありましたか。

(7-1 異なるところがある場合、どういう点が異なりましたか。)

(7-2 それはあなたにとって何か役立つもの、あるいは役立つと思われるものでしたか。)

(7-3 何か改善したほうが良い点があれば、教えてください。)

以上。

Attempts to Distill the Results of Integrated Multidisciplinary Japan Studies :Case Study of the Comprehensive Seminar “Processing of Knowledge” at graduate school

Noriko MATSUNAGA, Teruhisa SE

Abstract

This is a report concerning research on attempts at graduate school to distill the results of Japan Studies to International students' education and Japanese language education.

In this report, we have reflected on the practices of the past three years to form a graduate education program to develop human resources for the comprehensive acquisition of both Japanese language and human social science. Based on their reports and interviews, we analyzed what the students have acquired and were dissatisfied with the course of the comprehensive seminar “processing of knowledge”.

As a result, it is indicated that there is the possibility that the students have broadened their horizons even into other fields besides the field of each teacher in charge of the lecture. However, it should be noted that the international students made a proposal for the improvement of the lecture because it was too difficult for them to understand and they realized that there was much for them to learn. In addition, a noteworthy point is that both International students and Japanese students pointed out the importance of discussion among students majoring in different fields.

As suggested above, it is necessary for teachers to share goals and methods of education in order for international students to understand more technical and comprehensive issues. Therefore, the need has been suggested that teachers in each field of study should be involved both in making texts from the editing stage and developing a curriculum which includes the students acting independently during the seminar.

Keyword : Japan Studies, Japanese Language Education, Processing of Knowledge, International Students' Education